2018年3月クルディスタン報告書

日本クルド友好協会



南クルディスタン(イラク北部クルディスタン地域)



問題を抱えながらの関係正常化

3日、イラク議会はクルド人議員を無視し予算案を通過させた。採決においてクルド人議員がボイコットする中、予算案が強行採決された。イラク連邦憲法には、クルディスタン地域の予算として国家予算の17%を配分しなければならないと明記されているものの、現行の予算案ではそれが12%しか確保されていない。クルディスタン地域への予算配分問題は、クルディスタン地域政府(KRG)による給料遅配問題と地域不安定化に直結する。同日、イラク中央政府報道官は、中央政府とクルディスタン地域政府の間の紛争によって、クルディスタン地域の公務員の給料に遅配が生じることはないと発表した[3日、バスニュース]。中央政府はクルディスタン地域の民心掌握を狙っている。13日、イラク首相アバディはクルディスタン地域において国際線就航再開を宣言した。国際線就航再開に向けた取り決めには、今後空港での出入国をイラク中央政府の管理下におくことが定められている。イラク中央政府は関係正常化ではなく、中央集権の強化を望んでいる。

ペシュメルガへの恩

アメリカで、対 IS 作戦におけるクルド人部隊ペシュメルガの貢献を記録したドキュメンタリーを、議会関係者に見せる催しがなされた。5日、2人の上院議員がその上映会に参加した。ホワイトハウスにイラク中央政府に弾圧されるクルド人への支援を陳情するのではなく、議会内の草の根レベルで支持を獲得する狙いがある。アメリカ政府としては、クルド人だけに肩入れするわけにもいかずイラク中央政府とも適切に関係を保っ

ていく必要がある。一方でクルド側は、このようなアメリカの態度を「裏切り」と捉え始めている。というのも昨年9月に独立を問う住民投票を実施した時、アメリカはクルド側に自制を促し、実施後の中央政府からの制裁について看過したからだ。IS の脅威がほぼ無くなった現在、クルド人の戦略的価値は下がりまた見捨てられるとの見方がある。アメリカには多額の戦費と多くの犠牲を払ったイラクで影響力保つため、クルド人を見捨てることができない事情がある。現在の新生イラクは、アメリカ主導で建国されたものの、マフディー軍率いるサドル始め政治に影響力を持つ有力者は反米志向の強いものが多い。イラク政治を主導するシーア有力者はイランの意のままに動く。またイラク中央政府はロシアの防空システムを導入しようともしている。7日、イラク駐ロ大使は、もしロシアとの間で交わされた S400 購入を巡りアメリカと問題が生じることがあれば、外交的手段で解決すると発言した。反米志向の強いイラクにあって、クルディスタン地域は唯一と言ってもよい親米地域だ。アメリカとしてもペシュメルガの犠牲報いなければ、地政学的失敗を犯すことになる。

・トルコの新たな脅威

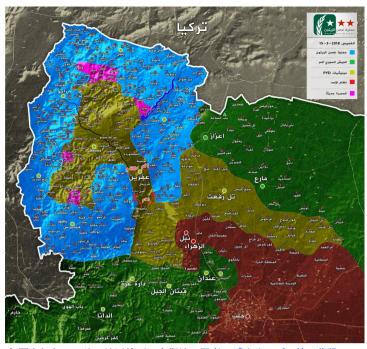
トルコ大統領エルドアンは、北シリア、アフリンでの成功に気をよくしイラクでも越境作戦を遂行しようと画策している。8日、トルコ外相チャブシオールは外遊先のドイツにおいてイラク議会選挙後にイラク中央政府と共同でクルディスタン労働者(PKK)掃討作戦を行う用意があることを明らかにした[8日、「自由」紙]。イラク国民議会議員アブドゥル・アジズ・ハッサンは、イラクメディア上でチャブシオール氏の発言を否定する声明を発表した[17日、イラクニュース]。ハッサン氏は議会内安全保障委員会に所属しており、中央政府にトルコ軍の越境作戦を容認しないよう助言したと伝えられている。PKK はこうした動きに先手を打ちヤジーディの町シェンガルから戦闘員を退去させた。

ロジャバ(西クルディスタン、北シリア)



・アフリン市陥落

18日、トルコ軍とその傘下勢力はアフリン中心部を支配下においた。当初は先月に引き続きトルコのアフリン侵攻とクルド側シリア民主軍(SDF)、人民防衛隊(YPG)の抵抗が報じられていた。シリア民主軍は SNS 他で要衝ラジョでの激戦におけるトルコ軍の戦車破壊の瞬間と称する映像を公開し、抵抗を PR した。8日、シリア東部デリゾールから移送された戦闘員、兵器、弾薬がアフリンへ到着したと伝えられた[8日、シリア人権監視団]。それゆえ当初は、3年前のコバニの戦い同様アフリン市内での徹底抗戦も予想された。アフリン市に近い山岳部の要衝が占領され、また別の戦線もトルコ側の進撃が続き包囲される形になるとその風向きが変わった。



包囲されたアフリン地区並びに市街地 写真: <u>「オリーブの枝」作戦SNS</u>

そのためクルド側の主力部隊は包囲されるのを避けるため、アフリンの放棄を決定し残る支配地域へ撤退を決定したと見られる。アフリンでの目立った市街戦はなく占領軍は悠然と市内に入った。そしてアフリン市内では、かねてより予想されていた反体制派勢力による略奪が始まった。



アフリン市中心部で略奪を繰り広げる反体制派戦闘員 写真:AFP

反体制派勢力の蛮行は即座にトルコへの国際的評価にも直結するため、トルコ軍司令官より厳禁されていてもおかしくはない。トルコ軍と行動を共にする反体制派戦闘員は、AFP 他国際メディアのカメラのまで堂々と略奪を繰り広げた。トルコ軍は略奪を餌にアフリン侵攻に参加する反体制派戦闘員の士気を鼓舞していたと見られても反論の余地はない。一方で<u>戦利品の分配を巡りトルコ軍傘下勢力間で戦闘が発生</u>するという珍事があった[27 日、「今日 」]。

トルコはアフリン市が陥落したことを受けて、アフリン地区全体をトルコに併合するための準備として傀儡政権を設立した。19日、北シリア連邦アフリン地区政府に代わりアフリン地区を統治する評議会の設立が報じられた[19日、TRT ニュース]。その名も「アフリン解放議会」であり、議員は「解放者」を標ぼうするトルコと反体制派勢力の意向によって選ばれている。トルコは 1958 年にシリアの政変に乗じてアレクサンドレッタを含むハタイ地域を併合した。その際にも住民の保護を口実に出兵し、占領後は傀儡政府を作り形だけの住民投票を行いトルコ領に併合した。

・アフリンでの抵抗は新たな段階へ

北シリア連邦を実質的に統治する民主統一党(PYD)は、このままアフリンの占領を許し占領軍の横暴を指をくわえて眺めているのだろうか。アフリンが陥落した19日、PYD 共同代表サリフ・ムスリムはゲリラ戦の開始を宣言した[19日、ユーフラテスニュース]。クルド側の声明によるとクルド人戦闘員はアフリン地区の至る所に潜伏しており、占領軍の戦闘員や拠点へ攻撃を加える用意がある[18日、ロイター]。実際18日、YPGはブルブル地区でトルコ軍の装甲車を破壊したと映像と共に発表した[18日、ユーフラテスニュース]。ブルブル地区は前掲の画像において明らかなように、この時点でトルコ側は占領下にあると発表していた。PYDは以前から治安維持と侵略者に対する自衛のため、住民に軍事訓練を施し郷土防衛隊(HPC')に組織してきた。



HPC の女性たち (写真: ユーフラテスニュース)

アフリンは、「オリーブの枝」作戦発動前より北方と西方をトルコ領に、東方をトルコ軍と反体制派勢力の占領地と三方向を敵に囲まれていた。まともに主力部隊を投入し包囲殲滅されるよりも、住民を武装化し占領軍への抵抗活動を行わせ、トルコ軍をアフリンに釘付けにする意図があるとも考えられる。

自らが設定に関与した停戦枠組みを蔑ろにするエルドアン

6日、フランス外相ドリアンは、アフリン侵攻は中止すべきとのフランス政府の意志をトルコ側へ伝えた。フランス政府は、シリア内戦における停戦はアフリンを含む全土に適用されねばならないことを強調した。シリアの停戦枠組みの成立には、当然ながらトルコが大きく関与している。エルドアンは、アフリン侵攻は無条件で停戦から除外されるべきだと主張している。6日、エルドアンは公正発展党の会合において国連主導のシリア停戦を非難した。アサド政権によるイスラム主義反体制派勢力の包囲殲滅作戦における住民の被害に触れ、アサド政権の同盟国ロシアの反対により東グータでの作戦を止められない国連安保理を非難した。ロシアーイランートルコ枢軸が欧米に代わり中東情勢を主導するといった言説もあるが、全く馬鹿げていると言える。ロシアもイランもこのように身勝手なふるまいを行うトルコを同盟国とは到底見做さない。トルコはシリア反体制派の最大のスポンサーでありながら、同じく反体制派勢力支持の欧米に対し反抗的な態度を見せている。それゆえプーチンは、トルコを欧米抜きのシリア和平の枠組み実現、つまりロシアの国威発揚に利用できるとふんでいるのである。

•アフリン侵攻作戦による民間人への被害

8日、トルコ外相ジャブシオールはウィーンでの記者会見において、アフリン侵攻作戦は5月に終了すると発言した[8日、「自由」紙]。主要拠点、特に山岳部を支配下に置いたことで戦略的目的は完遂したとのことである。ジャブシオール氏は、繰り返し市民への被害を最小限にとどめていることを強調した。一方で、トルコの傭兵としての役割を果たす反体制派勢力の犯罪行為は繰り返し報じられている。反体制派の SNS にクルド人羊飼いを逮捕し詰問する様子を収めた動画が公開された[8日、ルダウ]。反体制派戦闘員は YPG に協力したとこの羊飼いを一方的に集団で問い詰めていた。



反体制派戦闘員に詰問されるクルド人羊飼い 写真:ルダウ

フォローする

もしトルコが住民への被害を最小限にとどめる努力をしているのであれば、当然その傭兵である。反体制派勢力にもそのための最低限の規律を求めるはずである。クルド人の民家から家禽を、商店からは物資を略奪し、このようにクルド人住民を脅迫する事例がいくつも報告されている。反体制派戦闘員はトルコのクルド人に対する憎悪を受け、そのまま行動に移しているように見受けられる。

トルコ軍が軍事目標以外への攻撃を多数していることも問題視される。1日、<u>シリア赤新月社の人道支援物資がアフリンに到着</u>した[1日、ロイター]。トルコ軍はその人道支援物資を輸送する車列に砲撃を加えたとの情報が、北シリアで活動するメディアから報告されている[1日、「新聞」紙]。

アムネスティも先月末、<u>トルコの無差別攻撃がアフリンの市民に大きな被害を与えているとの報告を発表</u>している。アフリンの病院が空爆の被害になっているとの情報も現地から寄せられた。



6:07 - 2018年3月17日

YPG Rojava

トルコ軍の空爆で破壊された病院 写真:@YekineParastin

エルドアンが繰り返しアサド政権による病院への空爆を非難していたのは周知の通りである。トルコメディアも盛んにアサド政権の空爆による病院の被害を報じてきた。トルコ軍もエルドアンが批判するアサド政権と変わらず、病院や人道支援物資輸送車列へ攻撃することを躊躇しないのである。

トルコ軍の行動は新たな「シリア難民」を生んでいる。トルコの軍事作戦により<u>9万8千人もの市民が避難</u>を 余儀なくされている[18日、国際連合人道問題調整事務所]。エルドアンはアフリンにシリア難民を帰還させる と嘯いているが、「帰還」する予定の難民たちはアフリンの出身者が多数を占めるわけではなく、実質的に元 住んでいたクルド人住民を追い出してアラブ人住民を定住させ、クルド人の人口比を減らそうという意図が透 けて見える。

・クルド民族性の破壊

トルコの軍事作戦に伴う被害は、現地住民の生命財産の損害のみならずクルド民族の象徴や歴史の破壊という形でも生じている。トルコ軍傘下の反体制派戦闘員はアフリン市中心部にあるカワの像を破壊し、その様子を世界に向けて公開した。



住民から略奪した重機でカワ像を破壊する反体制派戦闘員 写真:「新たな夜明け」組

政権寄りメディアは、カワの像を PYD の圧政の象徴であると論じた[19 日、「新たな夜明け」紙]。しかしカワとは現代のクルド人指導者ではなく伝説上の人物である。クルド人が多数を占めるアフリンにおいてカワの像はクルド民族復興の象徴であり、圧政の象徴であることはあり得ない。トルコが参加の傭兵にカワ像を破壊させたのは、解放者としてのトルコを演出するためではなく、クルド人の自治の否定とクルド民族性の発露は今後許されないということを示すためである。カワ像の破壊は、トルコの軍事行動の目的がクルド人の民族浄化であり、トルコ国内で長年行ってきたようなクルド人否定政策をシリアでも実施しようとしていることをよく示している。

トルコの無差別砲爆撃によるクルディスタンの貴重な歴史遺産の破壊は、悪意の有無を問わずクルド人の歴史破壊につながる。

CNNは、トルコ軍による空爆によって破壊された歴史的遺産の惨状について報じた「9日、CNN」。



トルコ軍の空爆で破壊された遺跡 写真:CN

IS はイラク、シリアにおいて歴史遺産の破壊と盗掘を繰り返し、両国に歴史の喪失という取り返しのつかない損害を与えた。その IS をトルコは密かに支援していたと言われる。クルド人に言わせると、昨今の直接介入は IS の敗北が明らかになったことで本隊が出てこざるを得なくなったことによる。歴史遺産の破壊を意図したかの如何に関わらず、トルコは IS と同様の野蛮な行為に手を染めている。

・エルドアンはシリアへの侵略的行動を続ける意向を崩さず

エルドアンはメルシン(トルコ南部)で開催された AKP 大会において、アフリン占領後マンビジュ、コバニ、さらには北シリア連邦の事実上の首都カミシュロまで侵攻すると発言した[11 日、スター紙]。「NATO はどこだ?」とアメリカを始めとする NATO 加盟国に挑発的な言動を行った。トルコはアフガニスタン戦争他 NATO が関係する戦争に兵を出してきたが、NATO はトルコの「テロとの戦い」を妨害しているという趣旨である。トルコ国内で PKK をはじめクルド人反体制派勢力がトルコ軍への攻撃、破壊活動を行っているのは事実だが、その補給路はイラクであってシリアではない。トルコの「テロとの戦い」の論理は完全に破綻しており、それゆえ NATO の支持を得られていないのである。

トルコの挑発行為は中東大戦につながる危険性を秘めている。シリア内戦を巡る言説にアメリカがアサド政権またはイラン側勢力を攻撃しそこからロシアとの直接衝突に発展、遂には世界大戦に至るとの議論がある。これは表層的な議論であり、アメリカとロシアはシリア内戦の行方について事実上大筋合意している。アメリカは反体制派勢力によるアサド政権打倒を諦め、クルド人勢力はアメリカのみならずロシアからも支援を受ける。シリア内戦は日本メディアが論じるように「複雑化」ないし「混迷化」ではなく終戦に向かっている。混迷の度合いを深めているのはトルコである。現状アメリカはトルコの挑発行為によく耐え、両国の軍部隊が直接衝突する事態には至ってはいない。今後、エルドアンがアフリンでの「成功体験」から軍を各方面に進める時、アメリカ中心の有志連合軍と干戈を交える可能性は高い。問題はその時に、アメリカは矛を収める方向に進むであろうが、トルコは反米感情が非常に強まっているエルドアン政権支持層の突き上げに耐えられず戦争への道を突き進む可能性があるのだ。8日、エルドアンはアメリカとの関係修復のための交渉中に、トルコ国内の反米感情の高まりについて言及した「9日、「自由」紙」。

トルコとアメリカの対立がクルド人への態度に端を発しているように、トルコ支援の反体制派勢力も火種にな ることが考えられる。24 日、"穏健派"イスラム主義シリア反体制派勢力「シリア解放戦線」(元シリア自由人 運動)は、アメリカがイマーム・ブハーリー旅団をテロ組織に指定したことに抗議する声明を発表した。



アメリカの決定に対する抗議の英文声明 写真: シリア解放戦線 SNS

この勢力はウズベク人のイスラム過激派が集まったもので、シリア解放戦線と同盟関係にある。トルコがアメ リカの国益を脅かす姿勢を続けるのであれば、トルコ傘下の武装勢力も同様にテロ組織に指定されることは ありうる。

このように IS 台頭時以上にアメリカ軍のプレゼンスが必要とされているこの期に及んで、アメリカ大統領トラ ンプはシリアからの速やかな撤退について言及した[29 日、CNN]。即座にアメリカ軍高官に撤退を否定され、 各方面からIS の復活、シリアのクルド人勢力とトルコの全面衝突といった懸念の声が噴出した。過去のレ ポートにおいて論じているように、アメリカはシリアに同盟勢力を維持しその軍部隊を駐留させることは計り 知れない戦略価値がる。トランプ氏は数兆ドルもの戦費について言及したが、正にその拠出の見返りこそ北 シリアを勢力圏におさめることである。イラクと違い北シリアのクルド人主体の治安部隊はよく機能している ため、恒常的にテロ攻撃に曝されることもない。この発言はいつもの思い付きで発したものであり、戦略的判 断に基づいたものではない。北シリアからアメリカ軍が撤退することはあり得ない。

アサドの怒り

アフリン市が陥落した19日、アサド政権はトルコのアフリン占領を国連憲章と国際法に照らして違法である と非難した[19日、シリア国営通信]。

北クルディスタン(トルコ領南東部)



・クルド系政党への攻撃

クルド系政党「人民民主党(HDP²)」議員への不当な弾圧が続いている。トルコの司法は、ウルファの墓地で 演説を行った同党議員ディレク・オジャランに対し、「テロリストのプロパガンダに協力」したとの容疑で2年半 の刑を下した。また大国民議会においてトルコの侵略行為を批判したHDP議員に、エルドアンが所属する 政権与党公正発展党(AKP)の議員数人が暴行を加える事件が起きた[9日、ユーフラテスニュース]。マフム ト・トゥルル議員は、エルドアンがシリア各地からアサド政権との合意によって撤退した戦闘員とその家族を アフリンに入植しようとしていること批判する発言を行った。発言後 AKP の議員数人が、トゥルル議員に詰め 寄り暴行を加え、左腕に怪我を負わせた。トゥルル議員によると医師から全治1ヵ月半の負傷と診断された。

アフリンへの連帯

8日、アメド(ディヤルバクル)でトルコ軍によるアフリン侵攻に反対する女性のデモ行進が行われた[9日、アーリアニュース]。 行進に参加した HDP アメド副支部長フェレクナス・ウジャは、民主的デモ行進に対し警察が不当な制約を加えたことを非難した。

・トルコの侵略を警戒する周辺国

アルメニアは 2009 年以来続いていたトルコとの関係正常化と和平交渉を中止すると発表した[1 日、「自由」紙]。アルメニア側は、交渉にこれ以上の進展がある見込みがないことをその理由としている。アルメニア議員は、同国メディアに対しトルコがシリアで侵略行為に及んでいることと、その次の標的はアルメニアになり得ると発言した[27 日、ニュース・アルメニア]。トルコがシリアにおいて働いた侵略行為が結果的に許されたことで、トルコより軍事力が劣る周辺国は紛争解決の手段として武力が用いられることを警戒している。日本の新聞、テレビはトルコのアフリン侵攻がシリア情勢に更なる混迷をもたらすと評している。実のところトルコ自身に更なる混沌をもたらすことになる。トルコはオスマン帝国版図の復興といった「大戦略」に基づいているのではなく、PYDがトルコ占領軍からのシャフバ解放とヌスラ戦線からのイドリブ解放を唱えたことに対し、それを阻止しようと場当たり的行動に出たことによる。トルコはクルド問題への対応に失敗したことから、周辺各国を全て敵に回しその上 YPG を支援する同盟国アメリカとの衝突に向かっているのである。

東クルディスタン(イラン領西部)



・コルベル問題

1日、PKK 系メディアはイラン政府軍によるコルベル(クルド人荷運び)への銃撃を報じた[1日、「日報」]。経済の低迷が続くイランの中で、クルディスタンは特に経済的苦境に立たされている。仕事の無いクルド人の中で、イラン政府の統制外の密貿易に従事する者がいる。彼らは重い荷物を担ぎ、険しい山中を進み隣国イラクのクルディスタン地域との交易を行っている。イランの治安部隊はこれを取り締まるべく発見次第銃撃を加えている。

・クルド政党幹部の暗殺

6日、イラン・クルディスタン民主党(PDKI)の幹部カディル・カディリがイラクのクルディスタン地域、スレイマニ県近郊の村で暗殺された[7日、ルダウ]。同党は、イランの革命防衛隊が関与していると主張している。19日、PDKI は暗殺の実行犯5人が逮捕されたと発表した[19日、ルダウ]。KRG 当局は本件について何ら発表をしていないものの、警察部隊アサイシュに逮捕された可能性が高い。

文責:日本クルド友好協会研究員 並木宜史